

平塚良一 HIRATSUKA Ryoichi 2014



現代絵画界における平塚良一の位置

三田晴夫

本稿には平塚良一本人の希望により、あらかじめ決まったテーマが割り振られていた。それは表題にも示された通り、平塚良一と彼の仕事が現在の絵画界という星座のなかにあつて、どの辺に、どのように位置づけられるのか、というものであった。筆者は美術ジャーナリストとして三十数年間、美術の現場を巡り、さまざまの美術家の仕事について文章を書いてきたが、このようなアングルで注文されたのは初めてのことである。もちろん平塚は、自分の仕事がだれよりも勝り、だれに劣っているかを教えてくれなどと野暮な注文を寄こしたわけではなかろう。別の言い方をすれば、彼はただ、自分には見えにくい一つの事実、自分の仕事にはどれだけ現在の意味があるのかということ、客観的に知りたかったのに違いない。筆者は、平塚のその注文に納得のいく解答を差し出せるような力量は持っていないけれども、二十世紀に入ってから現在まで、絵画の遭遇した幾つかの激変と平塚の絵画とを照らし合わせる中から、見えてくる何かがあるはずだと思うのである。

その前提として、まず現在の平塚作品のありように言及しておかねばならないだろう。直近のギャラリー檜における個展の出品作を見れば、表象的には彼の絵画は大きく二つの系列から成り立っている。一つは、色とりどりの曲線片群が下地の色面上に浮遊している系列であり、もう一つは、小さな丸い点痕群がなかば法則的に配列された系列である。あるいは、ちぎれた紙片のようなかたちが点在する画面も見られたが、それもこの二つの系列の変奏態とみていいだろう。もちろん絵筆による彩色という絵画的作業が行使されているのだけれども、それぞれの基本的な単位をなすかたちは、ユニークな手作業の産物だ。たとえば曲線片は実物の草、丸い点痕は同じく豆を紙で覆い、その上からパレンか何かでこすって草や豆の形態を紙の表面に浮かび上がらせ、しかる後に色彩を投じたものである。この手法はフロッタージュと呼ばれ、すでに二十世紀の早い時期にマックス・エルンストによって創始され、ダダからシュルレアリスムに至る前衛運動のなかで多用されたことはよく知られる。

なぜフロッタージュが重宝されたのか。背景事情を考えると、十九世紀の近代絵画が確立したリアリズム美学と、その基盤をなした視覚本位主義に対する、二十世紀絵画側の疑念や反発がそうさせたと思われる。さらにその背景をなしたのが、人間の視線は存在や世界の一切を見通せるという近代の人間至上主義への疑念や反発だったろう。人間がつくり上げた近代文明の進化・発展の陰で、すでに人間の疎外や抑圧という矛盾が噴き出していた時代を思えば、それも当然かもしれない。対象を直接的に取り込み、じかに事物と触れ合うフロッタージュの作法は、まさに視覚では捉えきれない対象のリアリティーを写し取る触覚的技法だったのである。もちろん、この現代絵画の古典的技法は結果的に、視線のみならず手技に頼った制度的画法に対する異議申し立てでもあった。平塚があえてこの技法にこだわったのも、故なきことではなかったように思われる。エルンストが狂喜した偶然的な視覚効果もさることながら、文明や芸術を取り巻くこうした深い背景事情とかかわる絵画の成り立ちに、画家が思いを馳せることがなかったはずはあるまい。加えるなら、平塚が取り込む事物を植物に限っているのも示唆的ではあるまいか。

もう一つ、作品から見えてくるのは、第二次大戦をはさんだ二十世紀後半の1960年代から1970年代にかけて一大潮流をなした、欧米のミニマル・アート（最小限の芸術）やシュポール／シュルファス（支持体／表面）、あるいは日本の「もの派」などに象徴される非造形的傾向との関連である。こすり出し、着彩された草や豆のかたちを反復、散在させる作法は、造形表現に対していかにも禁欲的たろうとする態度を示してやまないからだ。とはいえ、たとえば均質にストライプを繰り返すフランク・ステラの、原理に帰依するような息苦しさや緊張感に満ちた画面にくらべ、平塚のそれが繊細な余韻を漂わせてやまないのは、たんにそれらが植物から得られたかたちというせいだけではなかったろう。造形や表現を切り詰めることを鉄則としたステラに対し、平塚は生理に則してそれをやってのけたような自在感を印象づけるのである。ところで現在の絵画界の星座には、かつて絵画が存亡の危機に見舞われたことが嘘だったかのように、屈託のない具象画や抽象画の星々が氾濫している。そのなかで数こそ少ないが、ひととき鮮やかな光芒を放っているのは、絵画の可能性を白紙から問い続けることをやめなかった画家たちの星雲だろう。疑いもなく平塚は、その星雲に属する一人といつてよい。

(美術ジャーナリスト・三田晴夫)

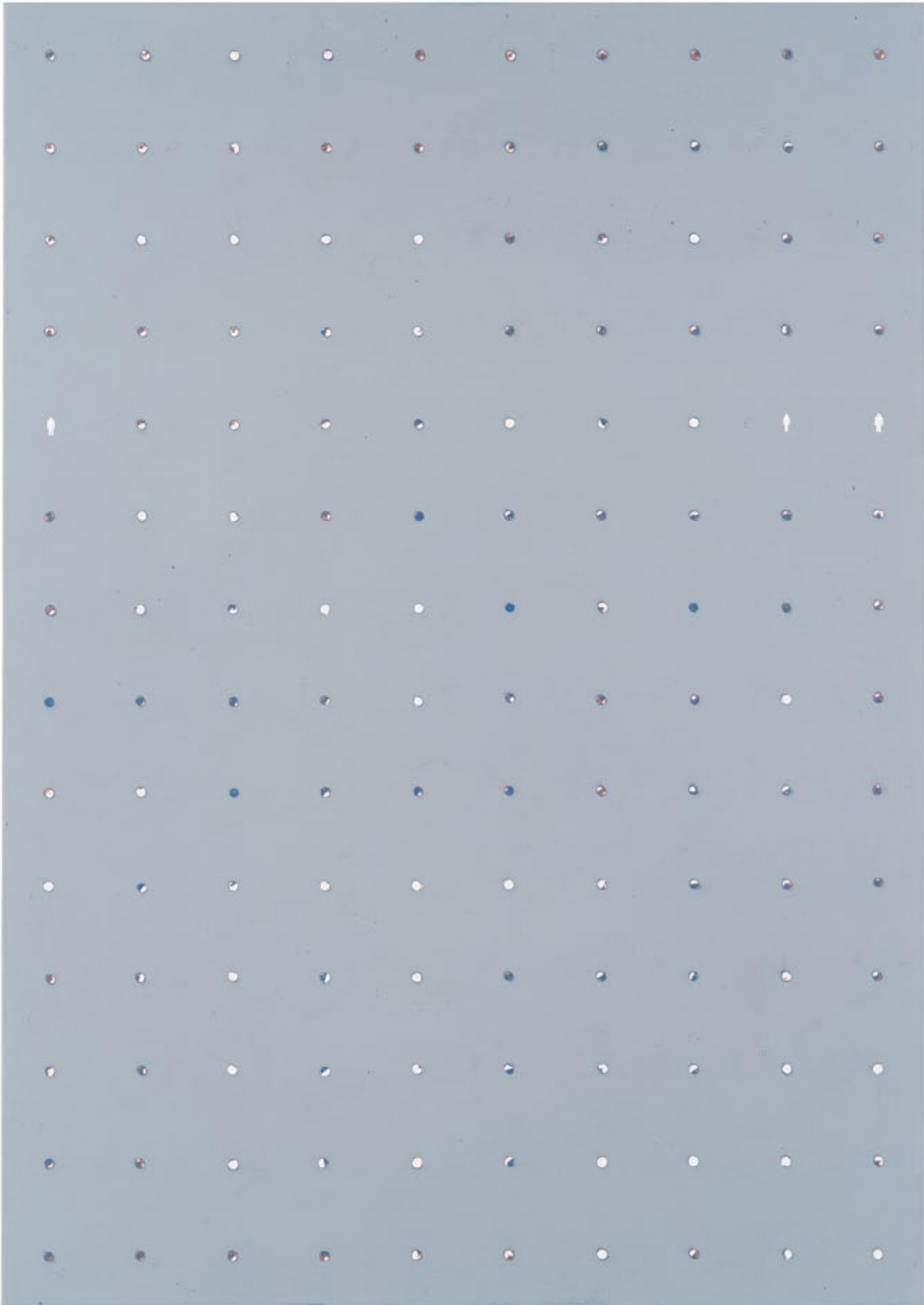




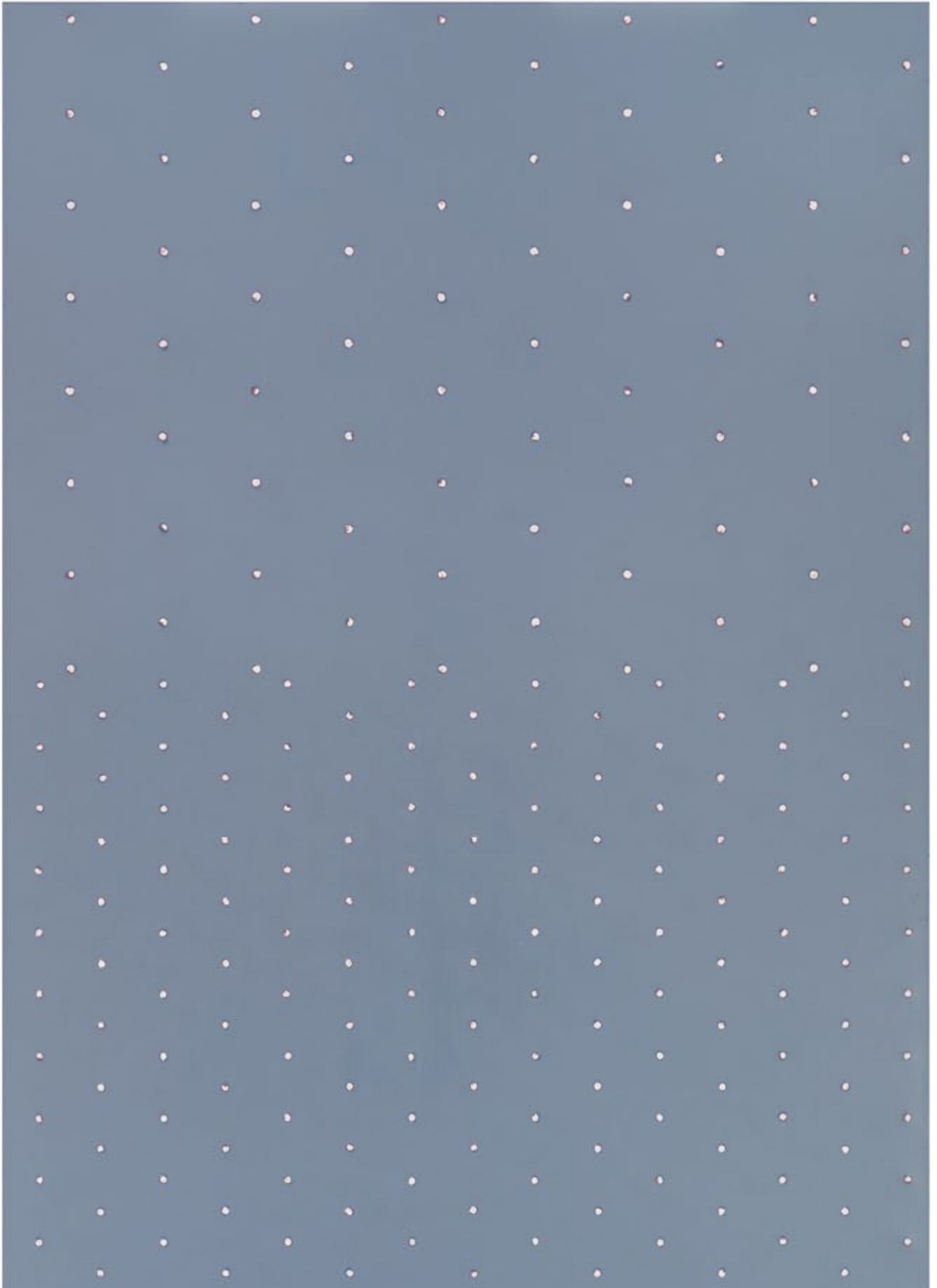


無題 1456 X 1030 mm ミクストメディア 洋紙 木製パネル 2014





無題 1456 X 1030 mm ミクストメディア 洋紙 木製パネル 2014





(左右とも) 無題 728 X 515 mm ミクストメディア 洋紙 豆 木製パネル 2014

平塚良一 HIRATSUKA Ryoichi

1947: 12月12日埼玉県浦和市生まれ
 1970: 日本大学理工学部工業化学科卒業
 1975: パリ国立美術学校絵画科ディプロム取得

▶ 個展

1980: ギャラリー トーシン (新橋/東京)
 1981, 82, 84, 85, 86, 87, 89, 91, 93: 銀座スルガ台画廊 (銀座/東京)
 1994, 96, 97, 2000, 01: ぎやらりい センターポイント (銀座/東京)
 1995, 98, 2003, 05, 07, 08, 11, 13: ぎやらりー由芽 (三鷹市/東京)
 1999, 2009: ギャラリー U・R・A・N・O (台東区柳橋/東京)
 2004: マリンギャラリー (釜山市海雲台区/韓国)
 2006, 08: 村松画廊 (京橋/東京)
 2007: ギャラリー ヴェルジェ (相模原市古淵/神奈川県)
 2009: 「GRAY SURFACE」展 (ブルースペース ギャラリー/ホーチミン市)
 2009: 平塚良一展 軌跡 (関口美術館 本館/東館 江戸川区葛西/東京)
 2011: 日仏会館 (渋谷区/東京)
 2012, 14: ギャラリー 檜 B・C (京橋/東京)
 2013: 不二画廊 (船場/大阪)
 2013: 樫画廊 (銀座/東京)

▶ グループ展/団体展

1976, 77: ヴィトリオ市 十一月展 入選 (パリ)
 1977, 78, 2006: サロン デレアリテ ヌーベル 出品 (パリ)
 1978 - 90, 2001 - 03: グラン エ ジュンヌ ドウジュールドヴィ 出品 (パリ)

1981 - 89, 92 - 2004: モダンアート協会展 (東京都立美術館)
 1988: 黄色い絵展 (練馬美術館区民ギャラリー)
 1994 - 2000, 02: C.A.F 出品 (埼玉県立近代美術館)
 1994 - 2000: C.A.P.P.I.N.G 展 (東京、釜山、蔚山、上海、横浜)
 2002 - 04: 日本現代美術作家展 (ザイニユル ギャラリー/ダッカ)
 2003: 「四人の日本人による絵画展」
 (ブルースペース ギャラリー/ホーチミン市)
 2004 - 07: Group L'OSIER (ギャラリー U・R・A・N・O / 台東区柳橋)
 2004: 国際交流現代美術展 「眼差しの東洋・手の記憶」
 -沖繩からの発信- (楚洲小中学校/国頭村)
 2004: 第四回 C.A.T. 展 (グリーンホール相模大野/相模原市)
 2005, 06, 08, 09, 11, 13: CAF. N 展 (埼玉県立近代美術館)
 2007: BRIDGE 2007 展 (AKKO ART GALLERY / バンコク)
 2010: 日越現代美術展 2010 (ホーチミン市美術博物館)
 2010: 2010 FIVE Artists exhibition (アトリエ・K / 横浜)
 2011: “墨の表現” 展 (ギャラリー志門/東京)
 2011: 「沈黙の森」 (山脇ギャラリー/東京)
 2011: シンフォニー・オブ・アーティスト - 2011 夏 - (中和ギャラリー/東京)
 2012: CAF. N IN KUMAMOTO 2012 (熊本県立美術館・分館)
 2013: 第3回おたビエンナーレ 2013 (群馬県太田市学習文化センター)
 2014: 「そして今は」 -パリに学んだ作家たち- (ギャラリー志門/東京)
 2014: 渋谷信之 平塚良一 展 (不二画廊/大阪)
 2014: 「袖ふれあうも 堀尾貞治」展 (ぎやらりー由芽/東京)
 2014: アルメニア・日本現代美術展 (エレヴァン、ギムリ/アルメニア)